

ツーリズム / 幻想としての観光

観光客（ツーリスト）はおよそ数週間ないし数ヶ月ののちには家に戻る。旅行者（トラベラー）はいずれの土地にも属さず、何年もかけて地球上のある場所から別の場所へとゆっくり移動する。（『シェルタリング・スカイ』ポール・ボウルズ）

0. "What's the purpose of your visit?"

長期休暇明けの会話は以下のように始まる。

「どこかへ（観光）旅行に行かれましたか？」

長期休暇を思い浮かべると、即座に観光旅行へ出かけることを可能にする時間と捉え、安易に長期休暇 観光旅行という構図を想定してしまう。美術館や歴史的な建造物を見るならば、ヨーロッパ。買い物をするなら、香港。のんびりとくつろぐならば、南の島。旅行代理店の店先に挿されたカタログは、さながら地球のインデックスである。確かに「観光」は豊かな余暇の過ごし方とされ、雑誌・テレビを始めとするメディアは旅情を掻き立てる光景を映し出し、観光情報を提示する。そうして、いつの間にか私達はそこに示される世界に目を奪われ、「観光」へと駆り立てられていく。

しかし、なぜ観光へ向かうのか？ 観光への指向は何に根差し、そしてどこに向けられているものなのだろうか？ 自明のものとして遂行されている「観光」に対して、このような問いを突きつけてみたいと思う。そして、今回「観光」に切っ先を突きつけることから、そこにあり、私達がいまもなお駆り立てられる「なにか」への根源的な問いを始めていければ、と思う。

1. ロマンの流布と実践の始まり

19世紀初頭、古典主義からロマン主義へと文学の中心は移行していった。感性と想像力を重んじるロマン主義は都市の喧騒から逃れようと次第に自然に対して注目をするようになる。その都市からの逃避、自然回帰という文学の流れはナポレオンのエジプト遠征に影響された結果、異邦見聞録的な文学作品を生み出した¹。これらの文学作品に共通して描かれるのは都市生活との対照的な異国の地、とりわけ自然状態に近いものとしての光景や人間達であった。

ある日のこと、ムハンマド・アリーのお抱え道化師が大衆を楽しませようとして、ひとりの女をつかまえ、商店の売台の上ですわらせて、観衆の目で彼女と交わ

った。その間、店の主人は、悠然と煙草をくゆらせていた²。

このようなテキストが多く生成され流布することで異国の光景への好奇心、つまり、「観光」への第一歩と言えるエキゾティシズムが形成され始めたのである。また、エキゾチシズム形成において、19世紀から開始された万国博覧会の果たした功績も無視することが出来ない。万国博覧会において工業製品などと並べて展示されたエキゾティシズムはあらかじめ記録、分類、配置され、そして西洋世界に公開されたのであった³。

年代を同じくして1841年、禁酒運動家であった宣教師トーマス・クックは列車をチャーターし、レスターで行なわれる禁酒大会へ向かうための日帰りツアーを実施した。パックツアーの始まりである。そして、51年ロンドン万国博覧会を契機にして、クックは事業を大幅に拡大させる。積立金制度による労働者の博覧会見学の奨励や顧客向けの旅行誌の発行を通じて、旅行の機会を増やすと同時に基礎知識を広め、民衆に飲酒よりも健全な娯楽として旅行を普及させることに努めたのである。その後、50年代から60年代にかけ、ヨーロッパ一周旅行やスイス旅行、アメリカ旅行を企画し、69年には最初のガイド付きエルサレム巡礼旅行を実現させている。

これらにより近代「観光旅行」の形式が形成されたのである。つまり、旅が苦難を伴いながらも旅行者がある目的を達成するためのものだった時代⁴から、観光が提案され観光客がそれを享受する時代へと移り替わっていったのである。重要なのは提案される観光は常にその地へ赴いた前任者が生成するテキストが元だということだ。前任者のまなざしから生成される言説を元にした実践、それはサイドが提唱した「オリエンタリズム」の形成に他ならない。

自己／他者をめぐる二項対立的な言説、その言説の自己中心性や両義性は、確かに近代以前から存在する。しかしながらオリエンタリズムは、そうした従来の他者認識のあり方を、文化的・政治的・経済的に拡張して、生活世界の全体へと複合化した認識の枠組みとして働くのである⁵。

「観光」は遠隔地を生活世界のまなざしの延長上にいる他者と措定することから成立する。かつて、フロベールとともにエジプトを旅行した写真家マクス・デュ・カンはその紀行写真集「エジプト・ヌビア・パレスチナ・シリア」を出版した。それはオリエンタリズムのインデックスであり、西欧世界に旅情を掻き立てるものだった。そのような隣の箱庭としての他者認識、それがかつて未知への冒険譚であった遠隔地への旅行を余暇の娯楽へと変容させていった要因の一つにもなっているのではないか。

2. 観光の詩学

アメリカの文明史家ダニエル・J・ブーアスティン⁶は複製技術革命によってもたらされたマス・メディアが製造する「事実」を「疑似イベント」と呼び、観光もその「疑似イベント」の一つであるとした。彼は「旅行・travel」はフランス語の労働や苦痛を意味する travail と同じ言葉であったという指摘から始め、「旅行」は能動的で生産性を求める直接的な行為であるとした。その設定ののち、「観光 (tourism や sight seeing)」はメディアによって作られたイメージをなぞり自己目的化して実践される「疑似イベント」であり、受動的で消費的なものである主張とした。

しかし、この主張には批判するべき点を多く含む。まず、「旅行」にブーアスティンが付与する生産性という点である。なぜならば、彼が設定する「旅行」の生産したものは15世紀のアメリカ大陸発見や以後のインド発見など、西欧のまなざしにのつての生産性なのである。つまり、発見する「旅行」を「本物」とし、鑑賞する「観光」を「疑似イベント」とする設定の差異は西欧世界のまなざしが持つ経験の有無のみに留まり、その他の地域では認められないものではないだろうか。

また、「観光」を受容する観光客をあまりにも衆愚的に描いてしまう点にも疑問は残る。ブーアスティンの主張そのままに受け止めてしまうと、観光客は本物たる「旅行」への志向を持たず、なんの疑いもなく「疑似イベント」を享受するものとされてしまう。この点についてフランスの社会学者ディーン・マッカネルは「オーセンティシティ (本物性、本来性) の追求」として「観光」を設定することで批判をしている⁷。

私たちは近代の疎外された世界に住んでおり、そこでは本当の自分を実現することができない。そこでもう1つの世界を求め、本当の自分を見つけ出そうと人は旅に出るというのである。そもそも住み慣れた家、あるいは田舎を捨て、都市へ出、自己実現をはかろうとした近代人とはその本性において「観光客」なのであって、マッカネルによれば、観光客の研究は革命の研究に匹敵する近代性 (modernity) の研究でもあるのだ⁸。

このマッカネルの観光客に対する設定は確かに納得できるものである。しかし、その「観光客」自身が感じる疎外感も、また外界に示されるもう1人の自分の可能性さえも、取り巻くメディアによって流布されたイメージなのではないだろうか。結局のところブーアスティンとマッカネルの議論は折衷的に包括され、「観光」はメディアの情報を参照することで実践される「疑似イベント」であり、その中で「観光客」は「オーセンティシティの追求」を志向するというに行き着くのかもかもしれない。しかし、現在においては、この議論の有用性自体にも疑いを持たざるを得ない。ギィ・ドゥボールは「疑似イベント」論を越え、物象化した世界そのものを「スペクタクル」が覆っているという「スペクタクル」論を展開した。世界そのものがスペクタクル化しているのならば、マス・メディアによって生産されるイメージに対しての真偽を問うというのは、もはや単純な真贋の判断という域を脱し、そのイメージの生み出す利益の分配自体を問うものにならなければいけないのではないだろうか。

さて、ここまでは自らのまなざしから「観光」を作り出していった西欧世界に焦点をあて話を進めてきた。これからは、そのまなざされる側の観光地、それも「南国」に中心を移行して「観光」を追っていくことにする。

3. 「楽園」の誕生

1779年1月17日、ジェームス・クックを始めとする大英帝国の船団がまた新たな島嶼を「発見」した。それ以前までにクックたちは、ニュージーランド、オーストラリア、タヒチ、トンガなど多くのオセアニア地域の島々を調査していた。彼らの目的は大英帝国の拡大であり、上陸した島々では事細かなスケッチや標本が採られ、中には生きた標本としてイギリス本土まで連れて行かれた現地人などもいた。そして、今回で3回目となる南洋航海でクックは「ハワイ」を「発見」したのであった。

クックのハワイ「発見」以後、ハワイは急速に変化していった。ハワイ諸島に4つあった王国はそれぞれヨーロッパ人の持ち込んだ近代的な武器を求め、覇権を争った結果、1810年にカメハメハによってハワイ全島が統一された。宗教もハワイの伝統宗教から宣教師たちの勧めていたキリスト教への改宗がなされた。その移行の中、伝統的なハワイの守護神たちへの信仰や神話の伝承は禁止された。また、宗教上の理由から「やかましく、肉体的」であったフラも禁止され、衣服もかつて半裸に近いものから洋装への統制なされたのであった。

このようにハワイは急激に近代化を果たしていった。しかし、ヨーロッパ人たちはハワイの先住民たちに近代化を促すと同時に「高貴な野蛮人」でいることも要求したのであった。1851年に公衆の場でのフラを踊ることは免許制になり、この興行免許を得て船員達から入場料をとってフラを見せる興行師が現れるようになった。フラは先住民の伝統的な舞踏から、訪問者への余興や「見世物」へと変容していったのだ。また、フラを踊る先住民の若い女性達へもそのまなざしは向けられる。キリスト教の布教に伴い、裸体を禁忌とされたハワイの先住民たちは、今度はその宣教師たるヨーロッパからカメラの前で裸体を曝すことを強要されるようになったのであった。そして、その写真は博物学的好奇心という名目の元にヨーロッパへ送られ、自然状態に暮らす人間というラベルを付けられて展示される。しかし、そこに立ち現れるのは、西洋男性中心社会の措定する周辺・他者へのまなざし、オリエンタリズムとジェンダーの交錯する場所で生み出される認識 エキゾティシズム なのである。こうして、都市から離れた場所にある、木々が生い茂り、官能と性に満ち溢れた地上の「楽園」像は生み出されたのだった。

しかし、このような「楽園」像が形成されていっても、20世紀初頭まで実質的なハワイ経済の基盤は白人入植者によるサトウキビプランテーションであった。また、いまは一大リゾートであるワイキキもタロイモ栽培と漁業のための広大な沼地に過ぎなかった。ハワイが「観光」化されるのは、1893年に白人入植者であったドール⁹

らがクーデターによりハワイ王朝を倒して共和国化し、そして1898年に軍事的価値が認められてアメリカに併合された後であった。

まず、ワイキキが公衆衛生上の理由という名目で現地の農漁民たちから接收され、埋め立てが行なわれた。1920年代半ばには、広大な土地が造成され、ホテルが建ち並び、徐々に観光地ハワイの光景が形成され始める。そして、そのころアメリカ本土からハワイへ観光客を送り込む連絡航路が就航するようになる。これにより、ハワイの本格的な近代観光化はますます加速することになり、大小さまざまなホテルが乱立するようになり始める。

このようなホテルに滞在する観光客達の目的はもちろん青い海と白いビーチであった。しかし、飽きっぽい観光客達はそれ以上に暇つぶしを必要とした。当時のワイキキにはすでにレンタカー・サービスが開業しており、観光客の絶好の暇つぶしとなった。しかし、それ以上に観光客を魅了したのは、夕暮れから始まるポリネシア情緒溢れるルアウという宴会と、その後に催される先住民の踊りや音楽だった。その結果、先住民たちはショービジネスに駆りだされ、伝統文化や芸能は観光客へ向ける娯楽色の強いものへと変容していくのであった。

本来はチャント（唱謡）しか伴わなかったフラは、スティール・ギターがリードするいわゆるハワイアン音楽とセットにされ、新しい形式の舞踏に変化していった。また、迫力のあるダンスを望む客たちのために、石油カンを打ち鳴らすリズムにあわせて腰を揺らすタヒチアン・ダンスが、何の注釈もなくあたかもハワイ人の伝統舞踏であるかのように演じられた¹⁰。

このようにハワイの伝統文化・芸能は、ヨーロッパ人のまなざしの影響によって「洗練」化という変化をするようになる。現在において、多くの観光客がハワイの伝統文化として想定するのは、その「洗練」化した「伝統文化」¹¹なのである。しかし、それらすべてを西洋帝国主義の権力と恭順するほかない先住民という二項対立の俎上に載せ、先住民の伝統文化へ対する一方的な文化破壊という帰結で終わらせてしまうのは安直である。文化は他の文化から影響を受けて変化するものでもあり、先住民の文化を特別視し、その伝統性からの逸脱を必要以上に問題視するのも西欧中心史観的であるといえよう。しかし同時に、資本主義市場の一部となり、世界システムに包摂された「南国」の人々が収入を求めた結果、「文化」を流通可能なコードにしなければならぬという現実もそこにはあった。そして、その傾向はハワイ以南の「南国」、資源や労働力に乏しく現金収入への道を観光開発に頼るほかないオセアニアの島嶼国ではより顕著になる。

4. 観光の政治学 観光文化の創出へ

文化研究において、観光地での文化を観光者から地元へ与える影響からのみ扱うのではなく、むしろ観光者と地元民との間に生成される新たな文化、「観光文化」として扱う動きがある。橋本和也¹²は「観光文化」を「観光者の文化的文脈と地元民の文化的文脈とが会うところで、各々独自の領域を形成しているものが、本来の文脈から離れて、一時的な観光の楽しみのために、ほんの少しだけ、売買される¹³」ものとし、「ツーリスト文化」というものとは区分されるものだと主張する。

「ツーリスト文化」は観光地に国内外のさまざまな地域から到来する観光客が持ち歩く文化の混交によって創出されるものと定義される。「ツーリスト文化」はもちろん地元の文化をエキゾチックな要素として取り込んではいるが、観光客が自国で消費している文化とそれほど違いがない。¹⁴

端的に言ってしまえば、観光者にとって観光地の文化の「真正性」は問題ではない。その「真正性」を問うのは地元に住む人々のみである。観光者にとっての「観光」で問題になるのはそれが観光者のまなざしに堪えうるものかどうかということである（ハワイにおけるアロハシャツなど）。つまり、観光者は自らの生活圏内で見られるプロ化の進んだ大衆文化と同等のレベルを観光地に求めるのだ。観光者のまなざしに堪える大衆文化を持たないが、観光立国を目指すほかない国々にとっては一方的に持ち込まれ消費される「ツーリスト文化」ではなく、地元が意識的に働きかける「観光文化」創出を目指さなければならないと、橋本和也は主張する。

5. エコ・ツーリズム

また、近年、地域の環境のみならず文化までも変容させてしまう観光開発の反省から新たな観光の形態「エコ・ツーリズム」が注目されはじめている。「エコ・ツーリズム」とは「観光を通じて環境や文化の理解を深め、それらを保護・促進しながら観光産業を発展させること¹⁵」である。2002年を国連は「国際エコ・ツーリズム年」と定め、現在 ODA や NGO などによって「エコ・ツーリズム」へ積極的な援助が向けられている。

しかし、橋本は、環境や文化の保護を訴える「エコ・ツーリズム」にしても批判すべき点がないわけではないと述べる。「エコ・ツーリズム」の理念は、1992年ブラジル・リオで開かれた地球環境サミットで目標に掲げられた「持続可能な発展」を源流としている。環境と文化保護を掲げ、未来へ資源を残し、「環境適正」を実現する観光開発、その発想自体「持続不可能な開発」を続けてきた先進国から案出されたものだ。また、「エコ・ツーリズム」は現地の自然環境を神聖化し、そこに立ち入る「観光者」たちに自らが自然環境・地元文化に対して配慮のある人間であるという意識を求め、植えつけてしまうという側面も持つ。しかし、経済難から観光地化する他ない小島嶼国をはじめとする第三世界にとっては、「エコ・ツーリズム」はいまままでの樹木伐採から樹木保全に変わった程度の認識しかなく、観光開発であることに

違いがない。「エコ・ツーリズム」においてはそのような「観光者」と「ホスト社会」との認識のずれがある。「エコ・ツーリズム」開発を進める ODA や NGO は、西欧流の自然環境意識が全世界で共有されているものではないという認識を持たなければならない。また、橋本和也は、「エコ・ツーリズム」を受け入れる「ホスト社会」が「観光文化」と同様な「エコ・ツーリズム文化」を創出することの必要性も説く。そして、「それがエコ・ツーリストを満足させ、ホスト社会に現金収入をもたらし、最終的にはホスト社会を観光者の過度の介入から守ることになるのである¹⁶」。

6. さいごに

今回は「観光」の始まりから現在まで概観を追ってきた。「観光」は「旅行」のまなざしから始まり、そのまなざしの経験を組織化したものとして継続してきた。そして、こんにちの発達した交通網と情報網における「観光」は、観光者と地元民が観光地の経済活動を通して実践されるグローバリゼーションともなりえている。それは、「マス・ツーリズム」から移行しつつある「エコ・ツーリズム」においても例外ではない。端的に言ってしまうえば、本当に環境や文化への影響を配慮するのであれば、「エコ・ツーリズム」へ行くのではなく家に留まるべきなのだ。また、環境や文化保護という言葉の裏にはグローバリゼーションの影がちらつくようにも思える。しかし、だからといって「観光」を否定し、参加するのを放棄してしまうこともまた危険ではないか。「観光」で得られる経験すべてを無為なものとし、実際に自らまなざすことの可能性を否定してしまうと、遠隔地の情報を得る手段はメディアのみになり、ますます寓話的な世界に取り込まれてしまう。重要なことはその「観光」で得た経験を組織化、一元化させないことではないか。自らの想像力を組織化しようとするものには抵抗するということが、観光者ならびに観光地・地元民が生産的な「観光」の場を創造することを可能にするのではないだろうか。

[参考文献]

- エドワード・W・サイード著 / 今沢紀子訳 『オリエンタリズム』(平凡社ライブラリー、1978)
- 吉見俊哉 『博覧会の政治学』(中公新書、1992)
- 春日直樹編 『オセアニア・オリエンタリズム』(世界思想社、1999)
- 山下晋司編 『観光人類学』(新曜社、1996)
- 山中速人 『イメージの楽園 —観光ハワイの文化史』(筑摩書房、1992)
- 山中速人 『ハワイ』(岩波新書、1993)
- 橋本和也・佐藤幸男編 『観光開発と文化』(世界思想社、2003)

注：

1. シャトーブリアンは地中海一周の経験から『パリからイスラエルへの旅』(1811)を記した。その後、ネルヴァル『近東旅行』(1851)など。
2. ギュスターブ・フロベール著/平井照敏訳『フロベール全集 8』(筑摩書房、1965) ギュスターブ・フロベール著/斉藤昌三訳『フロベールのエジプト』(叢書ユニベルシタス 618、法政大学出版局、1998)としても出版されている。
引用文は、エドワード・W・サイード著/今沢紀子訳『オリエンタリズム』(平凡社ライブラリー、1978)上巻 p.243-p.244 より再引用
3. 詳細は、吉見俊哉『博覧会の政治学』(中公新書、1992)参照のこと。
4. 例えば、十字軍遠征や学者の遍歴など。旅は苦難を伴いながらもその困難を冒すだけの価値のある業績を達成するために行なわれた。
5. 春日直樹編『オセアニア・オリエンタリズム』(世界思想社、1999) p.1
6. ダニエル・J・ブーアスティン著/星野郁美・後藤和彦訳『幻影の時代』(東京創元社、1964、原題は"The Image")なお、吉見俊哉「観光の誕生」山下晋司編『観光人類学』(新曜社、1996) p24-26 を参考にしている。
7. Dean, MacCannel, 1976, The Tourist: A New Theory of the Leisure Class, New York: Schocken Books.
なお、山下晋司「観光人類学案内」山下晋司編『観光人類学』(新曜社、1996) p.8-p.9 を参考にした。
8. 山下晋司「観光人類学案内」『観光人類学』(新曜社、1996) p.8-p.9
9. 缶詰、ジュースで有名な巨大農業資本 Dole である。米 Dole 社のサイトでは Dole の歴史が見られる。
<http://www.dole.com/company/about/history.jsp>
ちなみに、1893 年についてなにも触れていない。
10. 山中速人『イメージの 楽園 —観光ハワイの文化史』(筑摩書房、1992) p.91
11. アロハシャツはハワイに移り住んできた移民たちが故国から持ち込んだ布切れを使って作ったものである。ムームーも宣教師が作った女性用の簡易服だ。また、ハワイアン音楽の代名詞ともいえるウクレレはポルトガル系の移民がハワイに持ち込んだギターを改良したものである。
12. 橋本和也 1947~ 京都文教大学教授 文化人類学を専門にし、フィジーを主な研究地域にしている。
13. 橋本和也『観光開発の戦略—文化の売り方・売られ方』(世界思想社、1999)
14. 橋本和也「観光開発と文化研究」橋本和也・佐藤幸男編『観光開発と文化』(世界思想社、2003) p.58
15. 佐藤幸男「観光開発と文化をめぐる政治経済学」橋本和也・佐藤幸男編『観光開発と文化—南からの問いかけ』(世界思想社、2003) p.16
16. 同上 p.68